10

石山修武

石山修武

［プロフィール］

1944年生まれ	
1966年	早稲田大学理工学部建築学科卒業
1968年	早稲田大学大学院修了
	DAM･DAN創設
1973年	株式会社ダムダン空間工作所設立
1988年	早稲田大学教授
1998年	日本文化デザイン賞
1999年	織部賞

特集2｜本論

大きな問いを立てる建築家

松村秀一
Shuichi Matsumura

1——私的な問い

–

石山修武さんはとても珍しい建築家だ。会うと必ずそこにある種の“問い”が残される。いろいろな建築家と付き合ってきたが、こういう人はいない。私が直接的な影響を受けた大野勝彦さんもとても珍しい建築家だが、大野さんの場合“問い”ではなく、すぐには理解しにくい“答え”が残される。繰り返し“問い”が残されたのは石山さんの場合だけだ。

初めて石山さんに会ったのは30年前。大野さんのアトリエで『群居』創刊について話し合う場が持たれた。今から思えば、そこに集まっていた石山さん、大野さん、渡辺豊和さん、布野修司さん、長谷川逸子さん、山本理顕さんといった面々は、皆せいぜい40代前半、多くは30代だったのだが、20代半ばの私から見れば十分な大人たちだったし、そこでの話しぶりは、この人たちが建築界を動かしていると思わせるふうであった。なかでも妙な威圧感を放っていたのが石山さんだった。会議の終盤、それまで静かにかしこまっていた私が、その石山さんの目に留まってしまった。

「誰だよ、こいつ? …なんだ、トンキン大学か。何か言ってみろよ。…そんなことしか言えねぇのかよぉ。そこらの若い奴の方がまだマシだぜ」。

正直、こんなふうに言われる筋合いはないのだが、周りの優しい大人たちから「あれが石山流だから、気にしなくていいよ」と慰められたのを覚えている。私は石山さんの文章を読んだことがあったし、そこから知的な刺激を受けてもいたので、こんな荒っぽい言葉を投げつける人だとはつゆぞ思っていなかった。この時、残された問いは「石山修武、何者だ?」である。初めて石山さんの建築を見た人に残される「この建築、何だ?」という問いと通底するものだ。そして、この問いが次々に新たな問いを派生させるところこそ、石山さんとその建築の魅力なのだと今は思う。

その後、カラオケや『群居』での交流などもあって、石山さんにはずいぶん親しくしていただいてきた。残された問いは少なくないが、鮮明に記憶に残っているものを2つだけ。

–

①「マツムラ、オマエ、剣持昤が生きていたら今頃、何してると思う?」

内田祥哉先生、原広司先生夫妻と5人で会食した帰りに、2人で立ち寄った居酒屋でこう問い掛けられた。1970年代に夭逝した剣持さんの「規格構成材建築方式」[1]は、渡辺保忠先生の「工業化への道」[2]と共に、石山さんと私が共に引き付けられていたものだった。工業生産された建築部品が育ってきたら、それを真に生活者の役に立てるために建築生産の仕組み自体を革命的に変えなければならないという剣持さんの主張と実践は、1960年代後半にあって、とても強度のあるものだっただろうし、剣持さんの死後、世の中は彼の目指した方向ではなく、懸念していた方向に動いていたものだから、未完の論として石山さんにも強い影響を与えていたのだと思う。実際、石山さんの住宅論にしばしば見られる工業生産された部品への評価、流通マージンに代表される既存の流通体制に対する敵意、多能工あるいは素人施工の可能性への着目、設計者と施主による直営方式への憧れなどは、剣持さんの構想の中に完全に含まれている。

その剣持さんが「今も生きていたら?」と問われたのだ。正直考えたこともなかったが、端的で素晴らしい問いだと思った。石山さんは「世田谷村」[2001]においても自らこの問いを意識していただろうし、それを超えて剣持さんを出し抜くことを考えていたのだと思う。そう言えば、まだ世田谷村が構想段階にあった頃、石山さんからこんなことを言われた。

「マツムラ、今、剣持の規格構成材建築を超えるのをつくってるから、楽しみにしとけよ」。

–

②「マツムラ、オマエ新しい工務店始めたら?」

私が博士課程を終え、いわゆる“オーバードクター”としてブラブラしていた頃に投げ掛けられた問いだ。博士号を取って研究職を目指していた、また誰にもそう見えたであろう私にとって、意表を突く問いだった。「工務店ですか?」と確認すると「設計事務所はもう駄目だからよぉ。新しいモデルつくったら」との答えだった。

私のように住宅生産を研究対象にしていた者にとって、働いていない想像力をかき立てる大事な問いだった。こと住宅に関する限り、石山さん自身も言っていたように、設計料だけで業を成立させ続けるのは難しい。それに、そもそも設計単価など知っていても、ものの本当のコストは分からない。本当のコストが分からない限り、建築生産の変革など到底おぼつかない。だからと言って、剣持さんが「日常の中にしか存在し得ない怪物」と呼んだ請負業としての今の工務店のままでは駄目だ。そこで新しいモデルをつくれというわけだ。

私にはその気はなかったが、それ以来、各地の工務店と接触し、工務店とは何かを考え、若者の何人かに、私の好きなジャン・プルーヴェの工場=アトリエも参考にしたような新しい工務店的活動形態を目指すことを勧めてもきた。

–

2——大きな問い

–

今回、本稿を書くにあたって、1970年代から今日まで石山さんがその作品について書いたものを一とおり読んでみた。私自身が石山さんの強い影響下にあったことを再認識もしたが、石山さんは一貫して、若い頃に立てた大きな問いに対する答えを見つけようとしてきたのだと痛感した。そのブレのなさは問いの大きさの証左でもある。

その大きな問いとは、技術と人間の間の美しい関係とはどのようなものかということだと思う。“美しい”が分かりにくければ、“バランスの取れた”と言い換えてもいい。本誌で紹介される「幻庵」[1975]、「リアス・アーク美術館」[1994]、世田谷村、そして数々の他の建築作品。石山さんは、ほぼそのすべてにおいて、この大きな問いに対する答えを表現しようとしてきた。石山さんにとっては、この大きな問いの方が建築よりも先にあり、この問いに対する思考や答えを表現する媒体として、建築という芸術が力を持ち得ると直感して建築家を続けてきたのではないかとすら思える。

技術は人間が生み出したものであり、人間性の表れ以外の何ものでもない。しかしながら、人間性は変化しない。あるいは、変化したとしても、とてもゆっくりとである。これに対して、技術は知識を続々と効率的に集積・編成しながら、とても速く変化し続ける。人生程度のタイムスパンでは、技術と人間は原理的にバランスを見い出しにくい関係にある。実際、今次の原発問題に象徴されるように、技術と個々の人間の距離は総じて遠くなり、もはや個人の手の届く範囲には重要なものが何も残されていないようにすら思える。ヒューマンインターフェイスなどと称して、優しく近付いているように見せかけてはいるものの、その実、背後にある技術は個人が理解できるような代物ではなくなり、うっかりその優しさにいざなわれると、自分の生活をほとんど自分では制御できなくなってしまう。人間は、このアンバランスな技術の強さに、どうくみすればいいのか? それが石山さんを駆り立ててきた大きな問いだと思う。

この大きな問いに対する石山さんの、決して華々しく成功したりはしないが、粘り強く持続的な挑戦は、2種類の確信に支えられてきたように思える。

ひとつは、建築が技術と人間の関係をつくり直す先端的な現場になり得るという確信である。この確信について石山さんは、「形態は生産を刺激することができるのだ」[3]、「芸術は機械も含めて、あらゆる事物を総合的に関係づけてゆくことができるらしい」[4]といった言葉で繰り返し述べている。そして、「このシリンダー全体のパーツは971,550円で入手することができた」[5]という象徴的できっぱりとした発言は、石山さんがその初期からこの確信を持っていたことを明示している。

いま一つの確信は、個人個人の生きる力、人間の本能と言っていいかもしれないが、それについての確信である。『森の生活』のH.D.ソロー、師と仰ぐ川合健二さん、『バラック浄土』[6]で取材した奇妙なセルフビルダーたち、フラードームを草の根型技術に仕立て上げたアメリカのヒッピー、そして「開拓者の家」[1986]の正橋孝一さん。これらの人々の存在が石山さんの楽観的な確信に根拠を与えてきたのだろう。

多くの場合、石山さんの建築は私たちそれぞれの人生に直接関係しないが、この大きな問いはとても関係する。そして、私が石山さんから学ぶべきは、具体的な方法論よりも、まずはこの確信にあると思っている。

–

3——私からの問い

–

先に述べたように、石山さんの建築の魅力は次々に新しい問いを派生させるところにあると思う。実際、石山さ

[1] 剣持昤「規格構成材建築方式」『規格構成材建築への出発 剣持昤遺稿集』[綜建築研究所/1974]
[2] 「工業化への道(1)」渡辺保忠著[不二サッシ工業/1965]
[3] 「職人共和国だより」石山修武著[晶文社/1986]
[4] 石山修武「形態は知覚を刺激する」『GA JAPAN』No.8,1994.5-6
[5] 石山修武「幻庵録—シリンダーは宇宙卵としての世界の充足を目差す」『新建築』1975.6
[6] 『バラック浄土』石山修武著[相模書房/1982]

んの建築とその解説から、私の中に2つの問いが派生している。ひとつは石山さんの言う“開放系技術”に関する問い、いま一つは地域、あるいは地べたと石山さんの関係に関する問いである。

石山さんと私が共に好きな渡辺保忠先生の論文「工業化への道」。何が好きかと言えば、法隆寺以降の日本の建築史を、特権的な大工技術があまねく人々の入手できる技術になる過程、すなわち高度な文化の主要構成要素としての技術が広く普及する過程として物語っているところである。石山さんが戦後発達する部品・材料の生産の工業化を、「工業の力の恵みを借りて」などと終始、肯定的に捉えようとしている背景には、渡辺先生の書いたこの物語がある。しかし、ある技術が、どこでもいつでも誰でも使える技術になるには、複雑で政治的な構造を持った流通が欠かせない。少なくとも20世紀の現実はそうだった。建築に限った話ではない。そして、この複雑な流通の体制こそ、石山さんが技術と人間の関係を遠くするものとして忌避してきた対象なのである。完全に矛盾している。この矛盾を解くこと、それが技術と人間の美しい関係への一歩になる。

市場機構を通さず生産者と生活者を直接結び付けようとしたD–D方式[7]。一般的に使われている分野とは異なるところで部品や技術を用いる転用。材工一式の流通に対抗するための素人施工と直営方式。幻庵、開拓者の家以来、世田谷村まで続けられてきた、これら石山さん独特の方法は、この矛盾を解くためのものだと考えていいだろう。そして今、それらを包含した概念として石山さんは“開放系技術”を標榜している。その中には、インターネットを介して世界中から工業製品としての部品や建材を購入することが含まれていたりする。しかし、この種のネットを介した流通は、20世紀に支配的だった流通と違って、個人個人に従順な道具だと信頼していいものなのだろうか?

もう一つの問いも渡辺先生と関係する。1980年代にフラーが来日した折、渡辺先生が「あなたは地域性をどう考えているのか?」という趣旨の質問をし、フラーは何も答えなかったという話を、石山さんから何度も聞いた。石山さん自身が問われたように聞こえたのかもしれない。建築的に言えば、敷地やその地域的な文脈、つまり地べたとの関係、生産的には、地域の産業やそれを支える人々との関係を。

石山さんの建築を見ると、地べたとの関係がとても不安定に見える。何か納まりがつかない感じを受ける。幻庵やリアス・アーク美術館のように埋めてみたかと思うと、開拓者の家ではごろんと置き、世田谷村では足をはやしてサヴォア邸やダイマキシオン居住機械、あるいは八勝館御幸の間のように床を浮かせる。東日本大震災後の仮設住宅では、建築基準法と無縁であるため松杭の上に工業化された箱が載っかっているが、工業化の森から秋葉原感覚で集めたものたちをブリコラージュしてきた石山さんにとっては、この松杭方式のようなものが望ましいのではないかとも思える。

地域の産業や人々との関係について言えば、松崎や気仙沼での一連の活動以降、石山さん自身も盛んに言及しているし、実践もしている。時にそれは住民の連帯への期待として、また首長や地域の顔役への個人的な信頼として表明されてきた。人間好きの石山さんらしさが全面に出ていて好きなのだが、生産的には、さらなる踏み込みが必要だと思う。石山さん自身は、地域の職人技術に焦点を当ててきたし、最近では地べたに張り付く農業に着目した構想を発表している。すでに、よりクールな生産の仕組みとしての地域の問題に取り組む足場をつくり始めているのだと思う。ただ、地域という自然——人間系は、技術と人間の美しい関係を考える上で、最も有望な場の設定になり得るだけに、石山さん一人の問題として傍観するわけにはいかない。アンチ工業化、アンチ都市化、アンチ近代化の逃げ場として、あるいはうつろなヒューマニズムのよりどころとして、いたずらに“地域”に注目するのではなく、技術と人間の美しい関係の中核を担い得る場として今日的に“地域”を再構築すること、それを目指さなければならない。30年前、石山さんとお会いした時の『群居』の初心でもある。石山さんもそう思っているに違いない。

【7】 D–D方式
D–Dは、Direct Dealingの略。窓などのさまざまな住宅部品を使用者に直接届けることで、既存の市場を介さずに安価に住宅を手に入れられることを目的とした

まつむら・しゅういち——東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授／1957年生まれ。1980年、東京大学工学部建築学科卒業。
1985年、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修了、工学博士。1986年、東京大学工学部建築学科専任講師。
1990年、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻助教授。2006年、同教授。
その間、ローマ大学、トレント大学、南京大学、大連理工大学、モントリオール大学で客員教授を歴任。
主な著書:『「住宅ができる世界」のしくみ』[彰国社／1998]、『「住宅」という考え方—20世紀的住宅の系譜』[東京大学出版会／1999]、『団地再生—甦る欧米の集合住宅』[彰国社／2001]、『建築生産』[編著、市ケ谷出版社／2004]、『建築とモノ世界をつなぐ』[彰国社／2005]、『住に纏わる建築の夢—ダイマキシオン居住機械からガンツ構法まで』[東洋書店／2006]、『建築再生の進め方—ストック時代の建築学入門』[共編、市ケ谷出版社／2007]、『住まいのりすとら』[共編著、東洋書店／2010]、『建築生産【第二版】』[編著、市ケ谷出版社／2010]など。

特集2｜コラム

口伝と唯物教育のグランド・ツアー

渡邊大志
Taishi Watanabe

気仙沼「海の道」[1990]、「唐桑臨海劇場」[1988–93]など、1980年代後半から10年ほどを共にした地元の方々も、2011年の3・11で被災した。現在、石山研究室はその方々との協同を再開している。それは絵葉書プロジェクトによる募金活動から実際の計画まで多岐にわたる。その背景には1990年代後半からの「ひろしまハウス」[2006]の一連の活動がある。ひろしまハウスは、カンボジア・プノンペンにその大半を世界中からのドネーションと有志による自力建設によって、10年をかけて建設された。こうした研究室の小史が、長期にわたると予測される現在の気仙沼、唐桑での実践をやり抜く強い意志となっている。

私が知る石山研究室は、ここ11年のことではある。その間ひろしまハウスを始めとして、幾つもの建築の設計と現場を石山と共にした。当然そのたびに教わったことは多い。しかしそれだけでは師としての石山を語ることはできない。建築の世界に限定されたフィールドでの技術(表現を含む)や思想だけでは、師の本質を受け継ぐことにはならないからである。

その意味では2007年の3つの旅は重要なものであった。いずれも石山修武に連れられての旅であった。行き先はモロッコ、インド、韓国。全く宗教・文化圏の異なる土地を1年を通して回る私のグランド・ツアーであった。

石山研究室のグランド・ツアーの歴史は古く、もともとは、その土地の建築文化を学習する目的でなされた。石山がアジアの辺境である日本から中国、ネパール、インドへと旅したように、日本の近代、特に戦後日本の申し子である私が、今その旅を場所をずらして石山に連れられながらなぞらえていくことの意味を、この機会を借りて考えてみたい。それが石山を記述し、かつ気長に学習することになる。

–

春先のモロッコは早朝のフェズに尽きる。メディナの入り口であるブージュルード門の手前の小さな路地で石山が2、3秒であったか立ち止まり、何かを確認するかのように一点を見つめている。私もその後ろから眺めてみる。そのパースペクティブの先にはフェルト地の上下一体の服を頭までかぶったムスリムたちが、闇の中のシルエットとなってポツリ、ポツリとその路地を行くのみであった。その日のフェズの朝、ただただ行く人々の佇まいだけを見ていた。その背景に潜むマドラサ(神学校)の持つ数学的規律、藍青に染まった朝闇の中の三日月の光は、イスラム都市の風景特有の不可視の構造を表現していたと今は思う。

真夏はインドである。陽は垂直に地を照らしていた。タンジャブールの寺院はその光の下で一直線に水平に伸び、その内に安置されたリンガに突き上げられて今度は垂直に天空へと伸びていた。その一軸上に立って塔の先端を石山は睨みつけている。それはチョーラ朝の最盛期を築いた王による、まぎれもなく王の建築であった。民主主義社会には、このような純粋な立体をつくれる可能性があるのか。その日の晩に「果たして民衆は王になり得るのでしょうか?」と私は師に問わずにはいられなかった。

厳冬の韓国、河回村に着いた時にはすでに陽は落ち、その小さな農村は全くの闇に包まれていた。入り口でご老婆が「よくいらっしゃいました」と、おそらく戦時下で学ばされた日本語で迎えてくれた。宿まで案内するご老婆のシルエットは長く伸びた影となって、周囲の陰と同化して辺りを包み込む。腰高ほどの瓦と土の壁で挟まれて緩やかに上下左右にうねる道を、石山も私も無言で付いていく。途中、道端の木に彫り込まれた天下大将軍、地下女将軍も、通り過ぎる私たちを無言で見ていた。

–

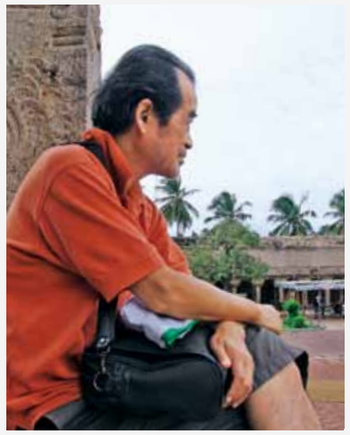
石山自身は建築史家の渡辺保忠、天才と石山が賞した川合健二から影響を受け、文章は山本夏彦に教わったと常々聞かされてきた。必然的に私はその遺伝子の末端にいるが、私はかつて石山が複数の方から受けたであろうものの総合を、例えばこの旅のような形式で石山から享受してきた。それは大学での近代建築教育や分野としての建築に限定された言語では語り得ない類のものである。

ただ、私が直感することは、師としても、建築家としても、あるいは教師としてさえも、石山は常に他者を媒介する表現者であり続けてきたことである。そのため、おそらく石山にとってこの3つは不即不離な同一の表現なのである。それがかつての気仙沼、唐桑での仕事や、ひろしまハウスに端的に現れていた。

その時、デザインや建築表現は、その文化的総合の分かりやすい視覚的表現にすぎない。そして私にとってのこのグランド・ツアーは、そのような石山による大学を始めとした戦後近代建築教育の枠の外にある、口伝と唯物教育の総合であった。石山に連れられることで春に不可視の美を視、夏に強い計画の意志に裏付けられた純粋な立体を視、冬に万物の発祥を視た。それもまた石山が進んで媒介してくれた、今の私が視たいと思う建築であった。これらは歳を重ね、経験と知識を積むにしたがってゆっくりと熟していく中で、今現在の断面を述べたにすぎない。旅はその人間の総合とも言うべき、まさに建築と同種のものであるがゆえに、石山との旅で受け取ったものを総括することは、いまだに私の能力を超えている。それは石山の佇まいそのものであり、また、旅を通してさまざまな人間の在りようだけを見せられていた。

今、石山は気仙沼、唐桑の人々と共に再び媒介者となって物語ろうとしている。そのためには、多くの亡くなった方々の鎮魂から始めなければならない。これらの仕事は10年単位の長期的なものになるだろう。私としては気仙沼、唐桑、アジアの仕事の数々など石山の旅を継承していけるものは、すべて継承していきたいと考えている。

寺院を見つめる石山修武[撮影地:インド・タンジャブール／写真:筆者]



わたなべ・たいし——早稲田大学創造理工学部建築学科助教／1980年生まれ。2005年、早稲大学大学院理工学研究科建築学専攻修了(石山研究室)。同年より、同研究室個人助手。
2008–09年、早稲田大学創造理工学部建築学科非常勤講師。2010年より現職。